

令和2年1月16日

学位請求論文（論文博士）審査報告

博士学位請求論文：

「P・F・ドラッカー：マネジメント思想の源流と展望」（文眞堂2018年10月）

博士学位請求者： 井坂 康志

審査委員

主査	商学部教授	勝部 伸夫
副査	商学部教授	上田 和勇
副査	商学部教授	田中 和雄
副査	経営学部教授	間嶋 崇
副査	日本大学商学部准教授	柴田 明

1. 博士学位請求者の経歴と研究の経緯

2. 論文の問題意識

3. 論文の構成と概要

4. 論文の評価

(1) 本論文の長所

(2) 課題とされる点

(3) 総合評価

1. 博士学位請求者の経歴と研究の経緯

井坂康志氏は1972年生まれで現在、47歳である。早稲田大学政経学部を卒業後、東洋経済新報社に入社し、編集、メディアプロデューサーとして現在に至っている。編集者として勤務する傍ら、2002年に東京大学大学院人文社会系研究科社会文化専攻社会情報学専門分野修士課程に入学し、須藤修研究室で情報経済論の観点から中小企業ネットワークの研究に取り組んだ。修士課程を2004年に卒業し、引き続き同博士課程に進学したが、この頃から研究の関心はドラッカーに移り、経営学・社会学的観点からP.F.ドラッカーの人と業績を主に研究するようになった。6年間在籍して、2010年に博士課程を退学している。学会活動としては、経済社会学会、日本経営学会、石橋湛山研究学会、経営学史学会等の会員で

あるが、特に 2005 年に設立されたドラッカー学会ではその設立、運営に深く関わり、2009 年からは理事、2011 年からは学会事務局長を務めている。また教育面では東海大学、明治大学などで非常勤講師や客員研究員を務め、2013 年からはものづくり大学の特別客員教授を務めている。

井坂氏のドラッカー研究は、すでに見たとおり大学院の博士課程の頃からスタートしており、すでに 15 年程になる。ドラッカーに関する著書も執筆しており、日本におけるドラッカー作品の翻訳者として有名な上田惇生氏との共著になる『ドラッカー入門 新版』ダイヤモンド社、2014 年があり、また共著の『ドラッカー一人・思想・実践』文真堂、2014 年もある。一般向けの実務的な著作として書かれたものとしては『自らをマネジメントするドラッカー流「フィードバック」手帳』かんき出版、2016 年があり、この本は韓国語にも翻訳されている。この他にドラッカーに関する論文は 20 本、また学会・研究会での報告は 40 本ほどがある。

今回提出された学位請求論文は、これまで刊行されたドラッカー関連の論文を中心に加筆修正を加えた上で、1 冊の著作として編まれたものである。なお、本論文は 2018 年度経営学史学会学会賞・著書部門奨励賞を授与されている。

2. 論文の問題意識

本論文は、P・F・ドラッカー (Peter Ferdinand Drucker, 1909-2005) のマネジメント理論がどのような思想的基盤を背景として生成発展してきたかその源流を明らかにし、ドラッカー理論の今日的意義を展望しようとするものである。

周知の通り、ドラッカーはオーストリア・ウィーンの生まれであり、その後アメリカに渡って『現代の経営』、『断絶の時代』、『マネジメント』といった世界的なベストセラーを次々に著し、マネジメントのグルと呼ばれるようになった人物である。ドラッカーと言えばマネジメントということになるが、その業績はマネジメント論に限定されるような狭いものでは決してなく、歴史理論、社会理論、企業理論、倫理・規範論といった幅広い領域を含むトータルな考え方をわれわれに提示している。それは理論体系と言うには厳密さに欠けるが、ドラッカー自身は体系化された理論構築を必ずしも目指してはいなかった。

ではドラッカーの思想とは如何なるものであり、それはどのように形成され展開されていったのか。井坂氏は本論文において、一般に関心の高いドラッカー・マネジメント論を直接的な分析の対象にはしていない。むしろドラッカーの思想的源流を初期ドラッカーと呼べる『経済人の終わり』(1939 年)、『産業人の未来』(1942 年)、『企業とは何か』(1946 年)という 3 冊の著作に絞って検討することで、その後のマネジメント論へと展開していく彼の認識枠組みや視座がそもそも如何なるものであったのかの根本を明らかにしようとする。いわばドラッカーの人物や思想形成を含む出発点に今一度戻る作業を通じて、ドラッカー理論に一貫して流れている彼の思想とその根幹を解き明かそうとするのが本論文の意図である。またそうした分析に基づき、ドラッカー・マネジメント論の狙いと意味、さ

らにドラッカー理論の今日的意義とは何かを明らかにしようとするものである。

3. 論文の構成と概要

本論文の構成は以下の通りである。

はしがき (i - iv)

序章 ドラッカー研究の現在(1 頁-17 頁)

第1 節 研究の意義

第2 節 先行研究と課題

第3 節 本書の構成

第I 部 時代観察と“初期”言論

第1 章 ウィーンの時代(21 頁-56 頁)

第1 節 幼年期-家庭とサロン

第2 節 デブリンガー・ギムナジウムの時代

第3 節 昨日の世界ウィーン-アトランティスからの報告をめぐって

第2 章 フランクフルトの時代観察(57 頁-88 頁)

第1 節 ジャーナリスト兼学究としての出発

第2 節 ヴァイマル末期からナチス時代-ジャーナリストとして

第3 節 視軸の形成-大衆の絶望をめぐって

第3 章 躍動する保守主義としてのアメリカ産業社会(89 頁-111 頁)

第1 節 アメリカへの転出と『産業人の未来』

第2 節 アメリカ革命の省察

第3 節 産業社会の中心的機関と GM

第II 部 基礎的視座の形成と展開

第4 章 観察と応答の基本的枠組み(115 頁-144 頁)

第1 節 観察における基底的认识

第2 節 社会生態における合理と秩序

第3 節 社会生態学的方法

第5 章 自由にして機能する社会への試み(145 頁-167 頁)

第1 節 自由社会の課題

第2 節 機能する社会の条件

第3 節 自由と創造する場としての企業

第6 章 知識社会の構想(168 頁-186 頁)

第1 節 知識観の諸相

第2 節 知識における自由と責任

第3節	知識と生態的秩序
第Ⅲ部	内的対話と交流
第7章	F. J. シュタール—継続と変革(189頁—207頁)
第1節	ヨーロッパ社会への視座
第2節	継続と変革によるアプローチ
第3節	産業社会における正統性
第8章	E. バーク—正統性と保守主義(208頁—225頁)
第1節	時代状況と保守主義
第2節	危機への観察と応答
第3節	産業社会への視座—保守=変革の原理
第9章	W. ラーテナウ—挫折した産業人(226頁—243頁)
第1節	ラーテナウとその時代
第2節	産業人の範型
第3節	第一次大戦と保守主義の挫折
第10章	M・マクルーハン—技術のメディア論的接近(244頁—265頁)
第1節	メディア論的対応
第2節	メディア論的技術観
第3節	印刷技術の文明史的解釈
終章	ドラッカーの基本的視座(267頁—283頁)
第1節	意図と構想
第2節	現代への含意
第3節	思想と展望
あとがき	(285頁—287頁)
謝辞	(288頁—289頁)
参考文献	(290頁—296頁)
事項索引	(297頁—302頁)
人名索引	(303頁—307頁)

次に、各章の概要を述べることにする。

序章「ドラッカー研究の現在」では、本書の研究の意義、先行研究と課題、そして本書の構成について説明がなされている。井坂氏は全体を論じるに当たって大きく3つの課題を挙げている。第1は、ドラッカーの人、思想、業績を総合的に捉えることである。第2は、初期ドラッカーと言われる『経済人の終わり』(1939年)、『産業人の未来』(1942年)、『企業とは何か』(1946年)の3つの著作に焦点を当てて分析することである。第3は、ドラッカー理論の現代的意義を明らかにすることである。こうした分析を通じて、ド

ラッカーの思想形成の展開過程と基盤を明らかにするとともに、最終的にはドラッカー・マネジメント論がどのような狙いをもって展開されたものであるか、そしてその現代的意義は何かを明らかにしようとしている。

第Ⅰ部では、ドラッカーの出生からアメリカ時代までの青年前期を主に取り上げて、生育環境の視点から眺望しようとするものである。

第1章「ウィーンの時代」では、1909年の出生から1927年にギムナジウムを終えるまでの歴史的出来事や、ウィーン社会の指導層に生まれたドラッカーの家庭環境、ウィーン最高の知性が揃ったサロン、またギムナジウムでの経験などを描きながら、それらがドラッカーの実人生の形成のみならず、言説、思想においても多大な影響を与えたことが指摘されている。

第2章「フランクフルトの時代観察」は、ウィーンを後にしたドラッカーが、ドイツのフランクフルトで新聞記者をしながら大学で学位を取得し、その後ヒトラー政権のもとでドイツを去るまでの時代が対象になっている。ドイツではナチズムが台頭し、全体主義の暴風に翻弄された時代であり、ドラッカーはそれを「大衆の絶望」が生み出したものと捉えた。人間の自由を抹殺する全体主義に対して、現状告発の書である『経済人の終わり』が準備されるが、その後のドラッカーの著作に一貫して見られる「自由と機能」こそが根本問題であることが論じられている。

第3章「躍動する保守主義としてのアメリカ産業社会」では、ナチズムを批判してアメリカに渡ったドラッカーが、アメリカ産業社会の中に自由で機能する社会の理想を見だし、企業を社会の代表的機関とする見方を提示していることを、『産業人の未来』と『企業とは何か』を中心に論じている。

続く第Ⅱ部では、ドラッカーのアプローチとして社会生態学を取り上げ、彼の基本的な視座の形成と展開が論じられる。

第4章「観察と応答の基本的枠組み」では、後期ドラッカーで多用されるようになった社会生態学が論じられている。社会生態学とはドラッカーの独創になる学問とされているが、それが近代合理主義の超克の意図を持ったものであることなどが指摘されている。

第5章「自由にして機能する社会への試み」では、ドラッカーの思想を見る上で極めて重要な概念である自由の概念が論じられている。ドラッカーは自由とは「責任ある選択」だとしており、自由にして機能する社会の芽をアメリカ産業社会の中に見い出している。マネジメント論では有名な「目標によるマネジメントと自己統制」（目標管理）もまた、ドラッカー自由論に基づくものであることが言及されている。

第6章「知識社会の構想」では、ドラッカーの知識及び知識社会をめぐる解釈をたどりながら、知識社会にあっても、知識あるものには自由と責任が付随すること、また現場の知識こそが正統性の基盤であり、秩序や権威の源泉たり得ること、また実践知の意義についても論じられている。

第Ⅲ部では、ドラッカーの思想形成に大きな影響力を与えたと思われるF・J・シュター

ル、E・バーク、W・ラーテナウ、M・マクルーハンの4人を取り上げて、彼らの言説を紹介するとともに、著作などを通じたドラッカーの内的対話、また直接的な交流が論じられている。

第7章「F・J・シュタールー継続と変革」では、19世紀ドイツの法学者・政治家であるF・J・シュタールーを取り上げ、ナチスによって焚書処分を受けたシュタールーに関するドラッカーの論稿をもとに、継続と変革の保守主義を論じている。正統性、自由、責任などのドラッカー思想の主要概念がすでにこの論考にも見いだせることが指摘されている。

第8章「E・バークー正統性と保守主義」では、近代保守主義の祖E・バークによる『フランス革命の省察』に依拠して、ドラッカーが依拠する保守主義的アプローチがどのようなものか積極的に論じられている。ドラッカーの社会に対するヴィジョンやマネジメントに関しても、保守主義的アプローチと関連させて議論されている。

第9章「W・ラーテナウー挫折した産業人」では、20世紀初頭のドイツを代表する産業人W・ラーテナウを取り上げ、マネジメントの担い手に期待される人間像が明らかにされている。ラーテナウをマネジメントの先駆者とドラッカーは位置づけており、ドラッカーの言う自由で責任ある産業人の姿はラーテナウに由来するものであることが指摘されている。

第10章「M・マクルーハンー技術のメディア論的接近」では、メディア学者M・マクルーハンとの交流が取り上げられている。二人の知的交流は深く、知識・技術に関するドラッカーの議論は、マクルーハンの影響を強く受けたものであることが指摘されている。またマクルーハンによる印刷技術の文明史的解釈についても触れられるとともに、進行中の情報技術の変化が文明を変えていくというドラッカーの見解が紹介されている。

終章「ドラッカーの基本的視座」では、全体を総括する意味で、マネジメント論がヨーロッパ時代に見た文明崩壊と再生に伴う意志と行動の所産であることが述べられている。しかしその一方で、主人公であるはずの個が、ドラッカーが求めた多元性や自由とは正反対の環境に置かれていることが問題点として指摘されている。

4. 本論文の評価

(1) 本論文の長所

本論文の長所としては以下の5点を挙げるができる。

①初期ドラッカーの業績や人的交流などの分析を通じて、ドラッカー思想をトータルに描き出した点である。

本論文はドラッカーの生涯でいえばマネジメント学者として世界的な名声を博す以前の時期、具体的にはウィーン時代、ドイツでの青年時代、アメリカに渡ってからの時代を主たる対象として、その後のマネジメント論へと連なるドラッカーの独自の思想とは何であり、それがどう形成され涵養されていったのか、またドラッカーの思想の根幹を成すものはそもそも何であったのかを明らかにしている。ドラッカーにとってヨーロッパ時代の経

験や人的交流はその後の彼の生き方や思想、言説を決定づけるものであり、とりわけ初期の著作にはドラッカーの思想を語る上でのキーワードである価値、自由、責任、機能、規範、正統性、保守主義といった単語が網羅されており、それらを中心に整理・検討してドラッカー思想の根幹に迫ろうとする井坂氏の試みは非常に的を射たものである。

このことをもう少し具体的に述べれば、ドラッカーは全体主義を告発する書である『経済人の終わり』によって世に出た。19世紀の商業社会が崩壊し、それにとって代わるべき社会的秩序を見いだせない中で、絶望した大衆は自由を投げ出し、ナチズムに代表される全体主義を生み出したと鋭く批判する。人間にとって自由こそが本質であり、自由とは責任ある選択だとドラッカーは喝破し、自由で機能する社会の再建こそが重要であり、アメリカ社会こそがそれを体現するものだと彼は見た。そしてアメリカの産業社会を牽引しているのが大企業体制であり、大企業は社会的、経済的、統治的機能を同時に持った機関であると位置づけられている。このように企業をはじめとする組織体によって社会が動いていくようになると、個人は組織体に所属して地位と機能を獲得する。そうした組織体においてマネジメントが不可欠なものになることは論を待たず、自由で機能する社会を目指すドラッカーのビジョンはそのままマネジメント論として豊かに展開されていくのである。つまりドラッカーにとってマネジメント論はそれだけが独立して存在するというものではなく、青年期から醸成されたドラッカーの人と思想の延長線上に積極的に位置づけることができる。

したがって、ドラッカーの思想の源流をたどり、彼の思想をしっかりと把握する作業は、ドラッカーのマネジメント論の意図と目指すべき方向性を理解する上でも不可欠だと言えよう。例えば、ドラッカーがマネジメントの「正統性」に関して、「人の強みを生産的にする」といった点に求めるのも、まさに「自由にして機能する」社会のビジョンなしには語れないものである。本論文の貢献は、そうしたドラッカーの人・思想・業績をトータルに示した点にある。

②ドラッカー思想の基盤を成すものとして保守主義を積極的に位置づけた点である。

ドラッカーの人間観は自由論に見られるとおり、人間を不完全で儂いものと把握する。完全たり得ないからこそ人間は責任のある存在と言え、絶対真理や絶対正義の前に、人間の自由はないと見る。これに対して、人間の理性を絶対視する啓蒙思想は理性万能主義だとドラッカーは批判する。ルソーもマルクスもヒトラーもみな理性主義のリベラリズムだということになる。だからアメリカの独立とは、啓蒙思想の専制に対する自由のための保守反革命なのだと、フランスのそれと対比的にドラッカーは捉える。ここでドラッカーがよってたつのがバーク流の保守主義である。それは理想を一挙に実現したり、青写真を描く立場に与せず、むしろ素材を最大限に生かしつつ、漸進的に理想に向かおうとするものだと井坂氏は言う。しばしば保守主義は変化に消極的とみられがちであるが、ドラッカーにあっては保守＝変革の原理なのであり、井坂氏はそれを近代保守主義という言葉で表現

している。したがって自由で機能する社会を保守主義的アプローチで回復しようというのがドラッカーの狙いであり、その系譜の中にマネジメント論はありと井坂氏は指摘する。これはドラッカーの理論と思想を考える上で非常に重要な指摘であり、十分に首肯できよう。

こうした近代保守主義のスタンスは別の面から見ると、デカルト由来の近代合理主義に対する批判という側面を持つ。それゆえ井坂氏は、ドラッカーの描くマネジメント像は、ある面で科学主義的な経営学説によって主張されるイメージの対極に位置するものだと指摘する。つまりドラッカー理論は科学と呼べるのかという問題である。この点は、ドラッカーの学説はアメリカでは、「学問としての経営学の本」とは見られていないという日本のある学者の言説とも符合する。しかし、科学か否かは別にしても、マネジメント論を含むドラッカー理論を正しく理解しようと思えば、彼がよって立つ近代保守主義というものが如何にドラッカーの思想の中核に位置しているかということ直視しないわけにはいかない。これまでのドラッカー研究において、この点は必ずしも大きく論じられては来なかった。したがって、本論文で保守主義をドラッカーの思想の中核を成すものとして積極的に取り上げたことはこれまでの研究の間隙を埋めるものであり、その意義は非常に大きいと評価できる。

なお井坂氏は、本論文において社会生態学についても多くの言及を行っている。社会生態学という言葉は、ドラッカーの1993年の著作から使われ始めたもので、近代合理主義を超克し、多元と生成を想定している点に特質があると井坂氏は論じている。この点も本論文の特長と言ってよいが、ドラッカーの思想の中でどう位置づけるべきかは必ずしも定かではない。

③ドラッカーの人、思想、業績を総合的に見ていくために、これまであまり取り上げられることのなかった人物を積極的に取り上げている点である。また一般に手に入る資料のみならず、自身のドラッカーへのインタビューなども含めて多面的に資料を用いていることも挙げられる。

本論文はドラッカーの思想を大きく扱っており、その形成過程において様々な人々との直接、間接の交流とその内面的な影響も論じられている。本論文に登場する人物はかなり広範囲にわたっている。中でも第Ⅲ部に登場するマクルーハンなどは、これまで取り上げられることがほとんどなかっただけに、興味深い論考になっている。

④本論文の特に終章「現代への含意」の第2節において、現代の企業家に与える影響面を言及している点である。つまりドラッカーのマネジメント思想の源流に関する歴史的アプローチを単に歴史的回顧に終わらせず、現代の企業家達に与える示唆についても論じている点が挙げられる。

例えば、次の井坂氏の指摘は現代の企業家・研究者に示唆に富むものであり、それをド

ラッカーの文献から読み取っている点である。

・ p. 272 (終章、第2節 現代への含意、下から4行目)「彼はマネジメントとは、そもそも科学ではなく、定量的な実証性になじむものではないとしている」

・ p. 271 (終章、上から3行目)「個のマネジメントの基本原則として、『仕事を通して人を成長させる』『経営管理者には品性高潔がなければならない』など、通常の経営学説でおおよそ論及されることの稀な発言も憚ることなくドラッカーにあってはなされている」

ただ、こうした貴重な指摘についてももう少し、より積極的かつ説得力のある説明がなされれば本論文の価値はより上がったといえる。したがって、この点は課題として残る。

⑤広範な文献渉猟と丹念な分析が行われており、ドラッカーへの直接のインタビューや未発表の書簡なども盛り込まれているため、資料的な価値がある点も評価できよう。

(2) 課題とされる点

以下の4点が指摘できる。

①先行研究の吟味の不十分さ

本論文では、日本におけるこれまでのドラッカー研究をとりあげて検討が行われている。初期の先行研究としては藻利、岡本、三戸といった研究者による著作があり、それらが紹介されている。しかし、そうした先行研究の分析が必ずしも十分とは言えない面が見られる。例えば、初期ドラッカーを取り上げてその意味を積極的に論じている研究はすでにあり、それらの研究のどういう点が不十分なのか、また取り上げられていない点は何かといった分析がしっかり行われていれば、本論文の論述や焦点のしぼり方も、もう少し違ったものになったのではないかと思われる。

②ドラッカー理論の現代的意義に関する指摘が不十分な点

本論文では、ドラッカー理論の根幹にある思想を明らかにすると同時に、その現代的意義や展望についても論じることが課題として掲げられていたが、必ずしもそれが積極的に語られているとは言えない。例えば、ドラッカーをめぐるアカデミズムと実務の世界のギャップが存在するといわれているが、本論文はそれにどういう貢献ができるのであろうか。実務家にとってドラッカー理論は進むべき方向性や経営を考える大きなヒントを示唆する面があり、現在でも熱心な読者は多い。本論文で展開された議論もアカデミズムだけでなく、実務家にも使えるように示すことができるのではないか。保守主義アプローチは、マネジメントの実務においても応用可能なのではないかと思われる。こうした点は今後の課題であろう。

③ドラッカーの全体像

本論文には最終章にドラッカー理論の全体像を示す樹のメタファーによる図が示されている。とてもよく考えられており、この図は本論文の意図を端的に示しているが、その一方で、さらなる検討が必要ではないかと思わせる面がある。社会生態学はアプローチなの

か、それとも領域なのであろうか。キーワードとして挙げられているだけに、そうした検討をすることで今後さらに議論が深められることが期待される。また本文には何度も視軸、視座、定点といった言葉が出てくるが、その意味が必ずしも明確でない面がある。もう一度整理される必要があろう。

④文章の難解さ

本論文はアカデミックな大著と言ってよいが、それゆえにと言うべきか、文章は必ずしも平易でわかりやすいとは言えない。文章の難解さは多くの読者の理解を阻むことにつながるのも事実である。誰を読者として想定しているにせよ、そういう点は改められるべきであろう。

(3) 総合評価

本論文は、次々と出されるドラッカー本のなかにあつて、ドラッカー理論とその思想の根幹に迫ろうとする非常に重厚で意欲的な研究である。これまでの研究の手薄な部分を埋める意味があり、その点で高く評価できる。ドラッカー研究者に対しても、インパクトを与える研究であったと考えられる。またこの論文を契機に、井坂氏のさらなる研究の飛躍も期待できる。

井坂氏のドラッカー研究は、すでに見たとおり大学院の博士課程の頃からスタートしており、すでに15年程になり、学会・研究会での報告は40本ほどがある。一例であるが研究論文の中で、「ドラッカーに学ぶ働き方改革—仕事と生き方をセルフマネジメントする」(2018年、信州大学における研究報告)、「ドラッカーのセルフマネジメント論、強みを成果に変える」(2016年、北海道大学における研究報告)などは、今回の評価対象の業績ではないにしても本論文の底流に流れているドラッカーの経営思想を内包しているものであり、こうした点も井坂氏のさらなる今後の研究に期待できるものである。

したがって、専修大学学位規定第13条第2項に基づき博士(商学)の学位授与が相当であると判断する。